

現代日本語の「～ばなし」とアスペクトの意味 －動詞の意味論への予備的考察として－

小西 正人

従来の現代日本語研究において、アスペクトの研究は、おもに動詞分類の研究であった。幾つかの共起制限と、そこから導出される意味をもとに動詞を分類しアスペクトの分析を行うことを中心とする研究方法である。

もしこの分析方法がまったく正しいのであれば、すべての日本語の動詞について、それがどの類型に属するかを丹念に吟味し分類し終わったところで、アスペクト研究はひととおり終了するはずである。

然し実際のところ、アスペクト研究は、ひと段落するどころか、ますます混迷の度を増している。例えば、ひとつの動詞が複数のアスペクト意味に関係する場合、これを「もともとそれらの動詞は複数の類型に属している」と解釈するのか、或いはそうではなく「もともとはひとつの類型に属しており、共起語句に随って新しい意味をもつ」と解釈するのか、決定的な根拠はいまだ提出されていない。

また、アスペクトの意味を従来の研究の枠内で分析する場合、例えば「継続相」と「反復相」とはどのような関係にあるのか（互いに排反であるのか、それとも一方が他方を含むことがあるのか）、或いは「起動相」と「瞬間動詞」はどのような相互関連があるのか、そして瞬間動詞以外の動詞を述語に備えた文が起動相をあらわすときには、どのような要因が関与し、どのようなメカニズムがはたらいているのか、等の問題を解決するには、分析にあたって事象内部の精しい記述と理解が必要となり、これまで扱われてきた数種類のアスペクトのみで説明を試みるのは難しい。

このような混乱が生じるのは、アスペクトの名のもとに研究されている現象が、形式を基にした文法範疇の視点で分析されるものから、共起語句や解釈の可能性などを含めた意味論的な視点のものに移りつつあるにも拘わらず、アスペクトおよびアクチオンサルトに関する意味（以下、アスペクト的意味と称する）を適切に記述する新しい方法がいまだ確立されていないからである。

本稿の目的は、小西（1997）で提唱した「事象の型」¹という概念を基として具体的なアスペクト的意味を記述するとともに、発話が動詞や共起語句と関係しながら特定の事象の型として解釈される様を、現代日本語の動詞接尾辞「～ばなし」を例にとり考察することである。

現代日本語の動詞接尾辞「～ばなし」は、付加される基体の動詞だけではなく、環境や構文、共起語句によってさまざまなアスペクト的意味を紡ぎだすことができる。また、この接尾辞は、書きことばで 사용되는ことは少ないものの、語られる事象の内部（の意味）を生き生きと叙述する話しことばにおいて生産的に使用される接尾辞であり、且つ比較的使用範囲も広く一般性を有するため、多くの動詞との共起を観察し分析することが可能である。それ故、本稿ではこの動詞接尾辞を通じてアスペクト的意味に接近を試みる。

本稿では、以下のことを明らかにする。

第1節では、有題「～ばなしだ」文をとりあげる²。まず、有題「～ばなしだ」文のアスペクト的意味を詳しく記述し、動詞接尾辞「～ばなし」が関係する事象に随って3つの意味類型が観察されることを示す。関係する事象とは、1）下位事象、2）上位事象、そして3）事象全体の3種類である³。以下に、それぞれ対応する例文を挙げる。

- (1) 昨日からこの部屋の電気はつきっぱなしだ。
- (2) 毎日僕はずっと歩きっぱなしだ。休むこともできない。
- (3) あの子はいつも遊んだら遊びっぱなしだ。

この場合、叙述される局面はそれぞれ、点灯後の結果状態が保たれている局面（1）、歩行が継続進行している局面（2）、そして遊戯後に後片付けもせず子供がいずこかに去っていった局面（3）、である。

¹ 「事象の型」というのは、森山（1988）で提唱された時定項分析を、実際の発話や文における意味解釈のアスペクト的意味をあらわすことができるように、より精密化したものである。例えば小西（1997）では、変化自動詞と関連の深い事象の型について、以下のものを指定した。

- i) 漸次変化過程形：はじめの3分間は加速度的に温度があがります
- ii) 移行形：たったの3分で温度は80℃にあがります
- iii) 結果維持過程形：はじめの3分間は温度は80℃にあがりますのでご注意ください

² 無題「～ばなしだ」文の場合、あとで述べる「特徴づけ（述語づけ）」されるべき主題がなく、意味解釈が有題「～ばなしだ」文に比べてはつきししないことがあるため、本稿では対象を有題文にしぼって考察を行う。

³ 上位事象・下位事象という概念については後の1.1で説明を与える。

次に、この観察をもとに、動詞接尾辞「～ばなし」の語彙的意味を「(なんらかの事態のあと) そのままである、という状態を叙述する」と分析し、それぞれの意味類型について、動詞接尾辞「～ばなし」の語彙的意味が具体的に解釈され実現している、という視点のもとで、前出の例を分析する。特に、「放置」の意味をあらわす場合(3)については、この意味が事象の上位下位を問わず事象全体として動詞接尾辞「～ばなし」の要求する事象構造と作用し、その結果導出される解釈であることを示す。

第2節では、継起的・並列的な事象を叙述する「～ばなしで」句をとりあげる。はじめに簡単にその構文的性質と叙述しうる意味を確認したあと、「～ばなしで」句のあらわすアスペクト的意味は、1) 主節で叙述されている事象をまるごと捉え、事象発生の背景(或いは事象発生時の状態)を「～ばなしで」句で叙述する場合(4)、2) 主節で叙述されている事象を持続的なものと捉え、その事象の内部を「～ばなしで」句で修飾し、付帯状況的意味をあらわす場合(5)、というふたつの場合があることを論じる。背景を叙述する前者の「～ばなしで」句が主事象を時間的に包み込むのに対し、付帯状況的意味をあらわす後者の「～ばなしで」句は主事象に時間的に包み込まれることになる。

(4) 鍵をかけっぱなしで出かける。

(5) ずっと歌いっぱなしで歩いた。

そして、この現象は「動詞のアスペクト分類」によっては決して説明されえず、動詞とは独立して存在する「事象の型」によって分析する必要があることを、いくつかの多義文の例によって検証する。

第3節では、それまでの分析をもとに、アスペクト的意味解釈において重要なのは事象の型であり、動詞自体ではない、と結論し、アスペクト的意味に関しては、動詞はただ、事象の型を構成する意味を提供できるような語彙的意味をもっているかどうか、そしてその提供は実際どのように解釈されるか、という点において発話への寄与を行うのみである、と示唆する。

1. 「～ばなしだ」を述部にもつ有題文

1. 1. 主題位置の名詞句について

この構文の一般的な特徴として、主題位置にあらわれる名詞句は多種多様である、ということが挙げられる。以下の例文において、主題位置にある名詞句が事態意味の構成に果たす役割は、実にさまざまである。

- (6) 隣の人は朝から体操しっぱなしだ。
- (7) その本は／なら昨日彼が読みっぱなしだ。(だから、きっと机の上にある。)
- (8) 都市部のゴルフ場はボールを打ちっぱなしだ。
- (9) 人気の市民プールは朝から人が泳ぎっぱなしだ。
- (10) (部屋に入ってきて) ん? このにおいはガスが漏れっぱなしだね。

この構文があらわす意味は、高見(1997)が述べるところの「特徴づけ」に相当、或いは類似するものであると考えられる⁴。これは動詞接尾辞「～っぱなし」ではなく、寧ろ取り立て助詞「は」が関係する構文の特徴であると考えられるので、本稿では深く追わない。「特徴づけ」をあらわす文としては、主題の恒常的な性質を述べる場合と、主題の一時的な状態を述べる場合がおもに考えられる。以下に、それぞれの意味をあらわす有題「～っぱなしだ」文をひとつずつ挙げる。例文(11)は主題の性質を、例文(12)は主題の状態を述べている。

- (11) ボールはいつも遊んだら遊びっぱなしだ。
- (12) 見てのとおり、この部屋は散らかしっぱなしだ。

以下の小節で、有題「～っぱなしだ」文の意味を具体的にみていく。その際、その意味を漫然と数え上げるのではなく、体系的に記述することができるよう、ひとつの概念を導入する。それは、「上位事象・下位事象」という概念である。ここでは、それぞれの概念について、以下のように定義を与える⁵。

まず、基本的には、行為者の「自己運動」をあらわす事象が、上位事象である。何らかの事物にその運動の作用が及ぶとすれば、その事物は行為者の自己運動の「対象」となり、その運動は「はたらきかけ」となる。また上位事象は、複合事象において、(時間的先後関係をあらわす場合は)時間軸においてももっとも前に位置する事

⁴ 高見(1997)では、英語の擬似受身文の可能性について、特徴づけという観点から分析を行っている。次の例文 i) の場合には擬似受身文を作ることが不可能であるのに対し、ii) の場合には可能であるのは、擬似受身文の主語が、他の要素により特徴づけられている(この場合であれば、「メアリーがあるとき私を待ったとしても、その事実は私の特徴や性質、属性を何ら記述するものではないが、」 「私が人を待たせるのが嫌いであり、いつも早めに行くようにしている」という事実が、私の特徴のひとつを示し、私がどのような性質の持ち主であるかを述べている」(高見 1997: 52、下線原文))からである、と述べている。

i) *I was waited for by Mary.

ii) I don't like to be waited for. (I always try to be early.)

⁵ この概念については、日本語の研究では影山(1996)、最近の研究ではTenny(2000)が詳しい。尤も、この二つの研究での扱いと、本稿での扱いは、細部に至るまで同じであるというわけではない。

象となる⁶。下位事象とは、行為者による運動をその中に含まない事象であり、それ故、事象の成立・存続理由を自らのうちにもたない。変化主体、もしくは状態・属性の主体に関係する事象であり、上位事象の運動の結果事象として配置され、上位事象とともに複合事象を形成する場合がある。

例えば、「俊がコップを倒す」という事象があるとすれば、「俊が（コップに対して）何か行為を行った」という部分が上位事象であり、「（俊の行為を受けて）コップが倒れた」という部分が下位事象となる。そしてこの二つの事象が統合され、一つの複合事象を形成する。本稿では、さまざまな事象のうち、一語に語彙化されており、単一の事象となっていると考えられる場合を扱う。

この第1節においては、まず、下位事象のみが関連する有題「～ばなしだ」文の意味をみる（1.2）。次に、上位事象に関連する有題「～ばなしだ」文の意味を、それぞれの下位事象のあらわれかたとともにみる（1.3）。そして、事象全体をひとまとまりとして捉える有題「～ばなしだ」文をとりあげる（1.4）。最後に、動詞接尾辞「～ばなし」の性質と有題「～ばなしだ」文との関係について考察を行う（1.5－1.6）。

1. 2. 下位事象にかかわる「～ばなし」

この構文において、もっとも平明であるのは、以下の意味であろう。

(13) この機械のレバーは上がりっぱなしだ。

ここでは「（レバーが）上がっている」という（静的な）状態が続いている、という状況が叙述されている。他にも次のような例がある。

(14) あの部屋の電気はいつもつきっぱなしだ。

(15) このエレベーターは入居してきたときからずっと壊れっぱなしだ。

変化主体の漸次的変化が継続している場合も、この有題「～ばなしだ」文で叙述することができる。

(16) この部屋の温度は先ほどから上がりっぱなしだ。

⁶ それ故、因果関係解釈との関係も深く、自己運動というよりは単なる原因であるような事象が、複合事象の中の上位事象部分としてはたらく場合がある。

(17) 株価は事件以来（ずるずると）下落しっぱなしだ。

また、事象の反復を意味する有題「～っぱなしだ」文もある。

(18) この仕事に就いてから、彼は誉められっぱなしだ。

この文のあらわす意味は、「誉められる」という事象が何度も行われ続けている、ということである。類例に、次のような文がある。

(19) 京都に来てから、ジャッキーは財布を落しっぱなしだ。

(20) 親分がかわって気が抜けた所為か、子分達はそれ以来へまをしてばかりで警察に捕まりっぱなし／お世話になりっぱなしだ。

上の例でもわかるとおり、単純に「反復を意味する」といっても、参加者が常に同じであり、同様の事態が何度も繰り返される、という場合から、全く別の参加者間の関係がある種同型と見做され、「反復」と認められる場合まで、その意味する範囲は広い。ここでは、それらの下位意味分類について詳しく扱うことはしない⁷。

1. 3. 上位事象にかかわる「～っぱなし」

前小節では、全て下位事象のみで成立している事象に関係する有題「～っぱなしだ」文を観察した。本小節では、上位事象を含む事象に関係する有題「～っぱなしだ」文をみることにしたい。

まず、単純に上位事象そのものが継続して続けられている、という意味をあらわす場合がある。この場合、下位事象については特に指定はない。敢えて下位事象を設定するとすれば、「動詞によって叙述された行為に従事している状態」ということになるのか。

(21) あの人は朝からVIP車を先導しっぱなしだ。

この文は、あの人が朝からずっと「先導行為」に従事していることをあらわしている。同じような意味をあらわす文に、次のようなものがある。

⁷ 複数の意味が生じる過程については、Jackendoff (1996)、小西 (1999) に詳しい記述がある。

(22) トールは昨日からはしゃぎっぱなしだ。

(23) さゆりさんはさっきから休みもせずに泳ぎっぱなしだ。

上位事象が引き続いているため、下位事象をもつ事象は、それにあわせて下位事象もその形を整えなければならない。次の例は、下位事象の状態部分を、上位事象にあわせて引き伸ばしたものである。

(24) この子はひたすら鉄棒にぶら下がりっぱなしだ。

この文は、この子が「ぶら下がり状態」を維持している、ということをあらわしている。この文の場合、動詞接尾辞「～っぱなし」により、「何らかの行為を行う」という上位事象が続いている、という状態が叙述されている。そして、その「何らかの行為」というのが「下位事象により叙述される状態の実現」であり、維持というのはそのふたつが合成されて引き出される意味である。以下に類例を挙げる。

(25) デモ隊は昨日から空港建設予定地に座りっぱなしだ。

(26) あの人はさっきからずっと鏡に向かいっぱなしだ。

これまで「態勢維持動詞」として扱われてきた動詞の多くは、この意味をあらわすことができる。実は、いわゆる「態勢維持動詞」そのものは、「態勢」状態が重要なのであり、「維持」の局面は常に必要というわけではない。それは、次の例文で示すことができる。

(27) 人形を居間の椅子に座らせた。

この場合、使役は「人形が座った状態にある」ことに対して行われているのであり、「人形自身^じがその態勢^{たいせい}を維持する」ことに対して行われているわけではない。

また、複合事象においても、下位事象の場合と並行して、(下位事象において) 変化主体の漸次的変化が継続している場合と、同じく下位事象において事態が反復されている場合とがある。それぞれ例を挙げる。

(28) 先生はさっきから少しずつ温度を上げっぱなしだ。

(29) 先生は今月に入ってから毎回温度を上げっぱなしだ。

反復の意味は、下位事象だけにとどまるものではない。上位事象が反復している場合も、この有題「～ばなしだ」文を用いてあらわすことができる。対照がはっきりするように、下位事象を含まない例を挙げる。

(30) 彼女の人生はチャレンジしっぱなしだ。

(31) 画面の中の蛙はさっきから跳ねっぱなしだ。

1. 4. 事象全体にかかわる「～ばなし」

そして、動詞接尾辞「～ばなし」の意味の中で、もっとも特異であり、この接尾辞を際立たせているのが、次のような例に現れる意味である。

(32) この子は遊んだら遊びっぱなしだ。

多くの場合、この文は「この子は遊んだあと後片付けをしない」という意味をあらわしていると解釈することができる。アスペクト的には、ひとつの事象が生じたあと、何らかの結果状態が生じ、その状態をそのままに放置する、という意味である。このような放置解釈の意味をあらわす例を幾つか挙げておく。

(33) 困ったことに、あのゴルフ場はいつも前の人が打ちっぱなしだ。

(34) 小さい子は食べたら食べっぱなしだ。

この「放置」の意味と、これまでの何らかの継続状態の中にいるという「継続」の意味とは、「朝から」などの開始期限修飾表現との共起可能性の違いによって区別することができる。継続意味の場合はこれらの開始期限修飾表現との共起が可能であるのに対し、放置意味の場合は共起することができない。

(35) 朝から酔っ払っぱなしだ。(いまま酔っ払っている)

(36) 昨日から歌いっぱなしだ。(まだ歌い続けている)

(37) 歌ったら歌いっぱなしだ。(放置の意味、歌は終わり後片付け放棄状態)

上の例文において、(35) (36) は放置の意味をあらわすことはできない。一方、(37) は「歌いはじめたら止まらない」という継続状況をあらわすこともできる。

1. 5. 動詞接尾辞「～ばなし」の特性

この小節では、これまでみてきた動詞接尾辞「～ばなし」の特性について、観察できることをいくつか確認しておく。それは、議論において、例文の容認度に問題がある場合、その責任の所在を見誤ることがないようにするためであり、またこれまでの観察をある程度一般的なものにし、次の小節で有題「～ばなしだ」文の特徴を考察する際のステップとするためである。

まず、動詞接尾辞「～ばなし」はある種の状態を叙述する表現をつくりだす、ということができる。

例えば「～ばなし」は、「～以来」「～から（ずっと）」などの、時間に関する開始期限修飾表現と共起することができる。この表現は、状態的な意味を強制する表現であり、動的な意味をもつ表現と共起すると、異なった意味あいをもつ文となる。

(38) 去年から借りっぱなしだ。

(39) 昨年の6月以来、価格は1万円台だ。

(40) この子は去年から咳をする。

動的な意味をもつ表現と共起している(40)では、「咳をする」という事象を叙述しているのではなく、主題に対する性状の規定、もしくは状態の述語づけをおこなった文であると解釈することができる。

また、動詞接尾辞「～ばなし」はアスペクト／イベントの意味に深く関わる意味をもつため、動詞によっては共起しにくいものがある⁸。それは、「その動詞が接尾辞『～ばなし』との共起によって意味されるはずのアスペクト／イベントの意味解釈が可能なのか？」という疑問から、「～ばなし」解釈が不安定な文ができるためである。この事実は逆に「全ての動詞がはっきりとしたアスペクトの意味を、語彙の段階において担わされているわけではない」という主張にもつながってくる⁹。なぜなら、もしそのようにアスペクトの意味が語彙の段階ではっきりとしているなら、接尾辞「～ばなし」による構成的な「アスペクト計算」は機械的に行われ、安定した解釈だけが算出されるはずだからである。

そして、これは評価に関わる事実であるが、「～ばなし」は悪いイメージを伴う、ということができる。動詞接尾辞「～ばなし」は、「(何かを行ったあと) 何らのケアもせずに放置したままである」というような意味をもつため、悪い評価を与えた

⁸ 例えば、アスペクトの意味があまりはっきりしていない動詞（「選択する」「受諾する」等）などとは共起しにくい。

り、含意したりする場合に使われることが多い。そのため、(通常は)望ましい、或いは好ましい意味で使われる動詞とは相性が悪く、容認度も落ちてしまうことがある。

(41) ??6月に入ってからこの機械を改良しっぱなしだ。

然しこれは「～っぱなし」のアスペクト的意味に関する側面ではないため、文脈によってこの非容認性を排除することは可能である。

(41') 6月に入ってから機械を改良しっぱなしだ。その間作業ができなくて困る。

1. 6. 動詞接尾辞「～っぱなし」と有題「～っぱなしだ」文

この小節では、これまでみてきた動詞接尾辞「～っぱなし」が示すさまざまな意味から、この動詞接尾辞の語彙的意味を措定し、導出されるアスペクト的意味を説明する。そして、同じ動詞が基体となっている場合でも異なったアスペクト解釈が得られることを述べ、動詞よりも寧ろ「事象の型」が発話のアスペクト的意味解釈において重要であることを示す。

まず、動詞接尾辞「～っぱなし」の語彙的意味は、「(何らかの事態のあと)そのままである、という状態を叙述する」と考えることができる。これは、事象全体の生起後の状態を叙述する放置の意味において顕著にあらわれるが、その他の場合も、基本的にはこの意味の実現である。これまでの例で検証してみよう。

(42) この機械のレバーは上がりっぱなしだ。

(43) あの部屋の電気はいつもつきっぱなしだ。

特定の状態が続いている場合、この意味は明らかである。即ち、「何らかの事態」とは、多くの場合、その状態をもたらした変件事象のことである¹⁰。

また、これらの上位事象継続の例においても、上述の「～っぱなし」の意味が実現していると考えてよい。先掲の例で確認しよう。

⁹ この事実は小西(1997)の主張を裏づけるものである。詳しくは稿を改めて論じる。

¹⁰ 勿論、述語動詞以外が特定状態の生起に関係していてもよい。例えば、次の文において、動詞「回る」は「回っていない状態」から「回っている状態」への変化を叙述してはいない。

i) 誕生以来、地球は回りっぱなしだ。

(44) あの人は朝からVIP車を先導しっぱなしだ。

(45) トールは昨日からはしゃぎっぱなしだ。

ここでいう「何らかの事態」とは、行為や事象の発現を意味している。具体的には、(45)における「はしゃいでいない状態」であったものから「はしゃいでいる状態」への変化、「はしゃいでいる状態」の実現である。この意味はしばしば開始の局面としてとりあげられる意味であり、「持続動詞」類からこの意味をとりだす手続きについては、これまでの研究において、あまりはっきりと定式化されてはいない。ここでの分析のように、動詞とは独立に存在する事象の型に、語彙的動詞意味をあてはめる、という形であれば、そのような困難を伴うことなく、開始局面の意味として解釈することが可能となる。

最後に、少しではあるが、有題「～っぱなしだ」文における、付加される基体の動詞と接尾辞「～っぱなし」の相互作用の具体例をみておく。

基体の動詞が動動的で有界的な事象を叙述するものであっても、「～っぱなし」句全体は状態叙述表現であるので、全体の意味としては状態化＝均質化されたものでなければならない。基体が動動的動詞であっても性状規定や習慣を叙述する文であったり、有界的な回数表現と共起していても頻度解釈や放置解釈になったりするのは、そのためである。

(46) うちの人のご飯の最中も顔きっぱなしだ。

(47) あの学生は最初に3回辞書をひきっぱなしだ¹¹。

そして次に、同じ動詞に付加された場合をみてみよう。ここでは、「膨らむ」の例をとりあげる。

(48) あの風船は膨らみっぱなしだ。

最も解釈しやすいのは、「膨らんだ状態のままだ」という状態継続の意味であり、そして次には「少しずつ膨らみ、萎むことはない」という漸次変化の意味であろう。然しこの文も、文脈次第で「放置」の意味をあらわすことができる。例えば、特殊な風船があり、その風船は膨らむ毎に、品質保持のため、事後に薬品を塗布しなければならない、とする。そのとき、風船管理係は次のように発話することができる。

¹¹ 書き言葉においては「あの学生は最初に3回辞書をひいたきりだ」という表現が好まれるだろう。

(49) あの風船は膨らみっぱなしだ。早く薬品処理をしないと。

「放置」の意味をあらわす場合、その「膨らむ」事象がどのように起こったか（例えば一瞬で起こったのか、時間をかけて徐々に起こったのか）、或いは膨らんだあとその状態を保っているのか、それとも既に萎んでしまったのかなど、事象内部の構成については何も問うものではない。ただ、「膨らむ」という動詞で叙述できる事象が起こりさえしていれば、この表現で叙述することができるのである。これを、「膨らむ」という動詞の「語彙的にもっている細分化されたアスペクト的意味」を細かく参照しながらいちいち解釈する、と考えるのは適当ではない。

2. 「～っぱなしで」

本節では「～っぱなしで」句を含む文について、記述と分析を行う。

2. 1. 「～っぱなしで」句の構文的位置

南（1993）によれば、「テ／デ」にはいくつかの意味があるが、「～っぱなしで」句に関係するのは次のふたつの「テ／デ」である¹²。

① 継起的または並列的な動作・状態の意味をあらわす（テ₂）

左手デカバンヲカカエテ、右手デ必死ニ吊革ニブラサガッテイタ。

② 原因・理由の意味をあらわす（テ₃）

キノウハ、カゼヲヒイテ会社ヲ休ミマシタ。

いずれの「テ／デ」もB類の従属句に従える、と南（1993: 80）は述べているが、このふたつの「テ／デ」は、「～っぱなしで」句においては多少異なったふるまいをするため¹³、本稿では特に断らない限り、①の「デ」について扱う¹⁴。

また、これらの意味の他に、手段や方法をあらわす「テ／デ」がある。

¹² 例文はいずれも南（1993: 80）による。また、「テ」に付属している下付数字も原文のままである。

¹³ 例えば、動作主のガ格（「僕がそのことを言って、部長が怒られました」）、事実の生起時を限定する表現（「昨日僕が行って、怒られました（怒られたのは今日）」）などはB類の従属句であれば共起できるはずであるが、①の意味ではほとんど不可能である。

¹⁴ 並列・継起→原因という意味の拡張（もしくは単なる関係）は充分あり得ることであるが、「因果関係」という意味解釈のステイタスや、統語論との関係（どうして統語的な影響が出るのか？）など、問題は山積されているため、ここではこれ以上ふれない。

(50) 阪急電車に乗って球場に行く。

これは「テ／デ」の本義が「主節であらわされる事象や状態に対する付随をあらわす」というものであると考えると、付帯状況という解釈とともに手段・方法という解釈も可能である¹⁵。

では、手段・方法をあらわす「テ／デ」のアスペクト的意味についてはどうだろうか。実際、手段や方法の意味をあらわす「テ／デ」節が叙述する事象は、主事象に比べて時間的に先行している場合が多い。然しそのような場合における「主事象の前に起こる」という解釈は「手段・方法」という意味から推測されるものにすぎないとも考えることもできるため、手段や方法をあらわす「～ばなしで」についても本稿では扱わない¹⁶。

また、動詞接尾辞「～ばなし」でまとめられる句が名詞句であることに注目するなら、竹沢（2001）による研究との並行性を考えることができる。竹沢（2001）では、状態記述二次述部¹⁷について、「X＋デ」という形式をもつ状態記述二次述部は、純粋な名詞にコピュラの分詞形が後続したものであり、主語のみならず目的語にも叙述を付加することが可能である、と述べている（竹沢 2001: 252-54）。

本節で扱う「～ばなしで」句は、「名詞＋デ」と同様に主語・目的語の状態について叙述することができるだけでなく、漠然とした「背景」「状況」とでもいったようなものを叙述することができる。

(51) タカシはズボンを穿きっぱなしで床に入った。

(52) タカシはアサコをスカートで穿きっぱなしで追い出した。

¹⁵ 例えば、同じ「デ」句であっても、次の i) は付帯状況を、ii) は手段・方法をあらわしている。

i) 裸で行く。

ii) 電車で行く。

¹⁶ このことから、全ての文の文のアスペクト的意味が確定できる、という（暗黙の）前提も疑義に付されることになる。

¹⁷ 竹沢（2001）では、二次述部を「その述部以外の要素（主動詞）から意味役割を付与される名詞句に対して新たな叙述を付加する場合の述部」（竹沢 2001: 238）と定義し、主動詞があらわす出来事の結果、その出来事に参与する要素が最終的に至る結果状態を表している場合を結果二次述部、主動詞が担う時制辞が指し示す時点でその参与者が有している状態を表している場合を状態記述二次述部と呼んで区別している。以下にそれぞれの日本語における具体例を挙げる。i) が結果二次述部、ii) が状態記述二次述部の例である。

i) a. 彼の髪が 長く 伸びた

b. 太郎が壁を 赤く／真っ赤に 塗った

ii) a. 太郎が 裸で／怒って／酔っぱらって 帰った

b. 太郎が肉を 生で／塩味で 食べた

（竹沢 2001: 239）

(53) 水がこぼれっぱなしで蓋を開めた。

「～っぱなしで」句が含みうる意味についても考えておく。修飾表現の階層について詳しい研究がなされている矢澤（2000）において、結果状態や動作を修飾するものに比べてかなり外側に位置するとされるような修飾表現（例えば頻度の修飾成分など）であっても、それが「状態」のある側面を叙述すると解釈される限り、「～っぱなしで」句のなかにあらわれることができる¹⁸。つぎの例文（54）は、「～っぱなしで」句の中に事象の頻度をあらわす修飾表現があらわれている例である。

(54) 二日に一度は先生を困らせっぱなしで、幼稚園を卒園した。

2. 2. 「～っぱなしで」句のあらわすアスペクトの意味

「～っぱなしで」句のあらわすアスペクトの意味は、大きくふたつの種類に分けることができる。ひとつは主節で叙述されている事象がまるごと捉えられる場合で、事象発生の背景（或いは事象発生時の状態）を「～っぱなしで」句で叙述する場合である。これまで「瞬間動詞」といわれてきた動詞が主動詞である場合、この背景の意味で解釈されやすい。例えば、次のような場合である。

(55) 拳を握りっぱなしで振り返った。

(56) 髪を立てっぱなしで出社した。

背景の意味をあらわす「～っぱなしで」句は、「主節で叙述される事象が生起したときの背景や状態をあらわす」というのが基本義であるため、主節の主語が「～っぱなしで」句の主語と共通しているものであったり（57）、「～っぱなしで」句が主節主語の（身体的）状態を叙述したり（58-59）する場合が多い。

(57) 鍵をかけっぱなしで出かける。

(58) 前髪を上げっぱなしで一礼する。

(59) 前を開けっぱなしで立ち上がった。

然し、これは単に意味的な傾向であり、必要条件ではない。次の例文における「～っぱなしで」句は、ただ文字通りの背景的状况をあらわしているだけである。

¹⁸ Tenny（2000）および同論文集に収められている論文の多くはこれらの現象について統語論的な説明を試みている。

(60) 水がこぼれっぱなしで蓋を閉めた。

「～っぱなしで」句のあらわす、もうひとつのアスペクトの意味は、主節で叙述されている事象を持続的なものと捉え、その事象の内部を「～っぱなしで」句で修飾し、付帯状況の意味をあらわす場合である。先にみた背景意味をあらわす「～っぱなしで」句が主事象を時間的に包み込むのに対し、この付帯状況の意味をあらわす「～っぱなしで」句は主事象に時間的に包み込まれることになる。これまで「持続動詞」として分類されてきた動詞は、一般的にこの付帯状況の意味であられる場合が多い。

(61) ずっと歌いっぱなしで歩いた。

(62) 目を瞑りっぱなしで操縦する。

但し、この付帯状況の意味の場合、「～っぱなし」を放置の意味で考えることは難しい。これは、放置の意味というのは手を加えない限り半永久的に放置状態が続くことを含意しやすいのに対し、この付帯状況の意味は主節の持続的な事態が続く間の一時的な状態として事象解釈に加わるからであろうと考えることができる。

前節でも強調したとおり、重要なのは事象の型であり、アスペクトの意味に基づく動詞分類ではない。そのため、いわゆる持続動詞であっても背景の意味をあらわす場合もあるし、いわゆる瞬間動詞であっても適切な文脈さえ与えられれば付帯状況の意味をあらわすこともできる。

それ故、この「～っぱなしで」句と動詞を共有する同じ文が、背景の意味と付帯状況の意味の両方で解釈することができる。そして、第1節で観察したように「～っぱなし」の状態解釈が多岐にわたることを考え合わせると、更に意味は膨脹することになる。以下に、多義的な「～っぱなしで」文の例を幾つか挙げ、簡単にその意味を述べる。

(63) 棒を立てっぱなしで帰る。

まず背景意味で考えられるのは、「棒を校舎のどこかに立てておき、その状態で帰宅の途につく」という意味解釈である。また、同じ背景意味ではあるが、「手の上に棒を立てる、という状態で家に帰る」という意味解釈も考えることができる。これは例えば、学校で知らないおじさんに「この棒を手の上に立ててごらん」といわれて棒を立て、「君は手の上に棒を立てるのがうまいねえ。このまま棒を立てっぱなしで帰る。」という会話文を想定すると、背景意味と付帯状況の意味の両方が読み取れる。

して家に帰りなさい」と言われたとき、この意味が実現している。動詞「帰る」が「帰途につく」という意味を実現しているか、「家に着く」という意味を実現しているかにかかわらず、事象はまるごと捉えられており、帰途における維持は語用論的な推論である。

それに対し、付帯状況の意味で考えられるのは、帰り道で「～ばなし」が実現している場合である。まず、「手の上に棒を立てる、という状態を必死に維持して帰り道を歩く」という場合が考えられる。これは「～ばなし」が上位事象と関係し、維持の意味がもたらされた場合である。また、反復的意味解釈をとるならば、例えば「いくつもいくつも、道に落ちている棒を道路脇に立てかけながら、帰り道を急ぐ」という意味が考えられる。

(64) 門を開けっぱなしで待つ。

この文は、結果状態と維持のふたつの意味解釈が優勢である。結果状態の意味は、「危険であるのに門を閉めるのを忘れ、閉めたと勘違いして待った」という場合に実現している。維持の意味は、「手を離すと自動的に閉まってしまうので、一生懸命開け続けていた」という解釈である。勿論、複数の意味、放置の意味もあらわすことができるが、ここで詳しく説明はしない。

(65) 子どもを預けっぱなしで寝た。

この文では、例えば「子どもを預けっぱなしのまま、就寝した」という開始局面の意味と、「子どもを預けてゆっくり8時間眠った」という持続局面の意味が考えられる¹⁹。これは、「寝る」に限らず、一般的にこれまで持続動詞といわれてきた「走る」などの動詞を含む文においても、同様の解釈を行うことができる。

然し、もし主動詞が本質的に持続の意味をもつのであれば、前者の開始局面の意味でこの構文を解釈することはできない。

(66) 子どもを預けっぱなしで待った／時を過ごした。

これは、これまで持続動詞とされてきた「寝る」「走る」などの動詞にとって、「持続」という意味は必ずしも必要ではないということを示している。

¹⁹ ここで「寝ているあいだじゅうずっと、子供を預け続けた」という付帯状況の意味解釈は、かなり劣勢である。

3. 動詞接尾辞「～ばなし」と動詞の語彙論的意味、事象の型

以上、現代日本語の動詞接尾辞「～ばなし」がアスペクト的意味と関わる様子をみた。「～ばなし」は、概ね「(何らかの事態のあと) そのままである、という状態を叙述する」という語彙的意味をもち、発話の意味解釈に寄与する。更に一歩進めて、動詞接尾辞「～ばなし」は、アスペクト的意味の観点からみると、(特定の) イベント意味、或いは型をもった事象を入力とし、その事象の特定の部分、或いはその全体を射程とした特定の状態を出力する、といってもいいかもしれない。

ここで重要なのは、事象の型であり、動詞自体ではない。アスペクト的意味に関しては、動詞はただ、事象の型を構成する意味を提供できるような語彙的意味をもっているかどうか、そしてその提供は実際どのように解釈されるか、という点において発話への寄与を行うのみである。

リファレンス

- Jackendoff, Ray. 1996. The proper treatment of measuring out, telicity, and perhaps even quantification in English. *Natural Language & Linguistic Theory* 14, 305-54.
- 影山太郎 1996 『動詞意味論 一言語と認知の接点』、東京：くろしお出版。
- 小西正人 1997 「動詞固有の意味とアスペクト的意味 ー或いは現代日本語の「変化動詞」のアスペクト的意味の正しい取り扱い方ー」、『言語学研究』第 16 号、175-210。
- 小西正人 1999 「変化述語をもつ「どんどん」文の意味からわかる「動詞固有の意味」と「文の意味」、そしてその関係について」、『言語学研究』第 17 号・第 18 号合併号、45-57。
- 南不二男 1993 『現代日本語文法の輪郭』、東京：大修館書店。
- 森山卓郎 1988 『日本語動詞述語文の研究』、東京：明治書院。
- 高見健一 1997 『機能的統語論』、東京：くろしお出版。
- 竹沢幸一 2001 「日本語の状態記述二次述部と品詞分類 ー記述的考察を中心にー」、『筑波大学 東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究成果報告書』、平成 12 年度Ⅳ (PART I)、237-64。
- Tenny, Carol L. 2000. Core events and adverbial modification. In Tenny, Carol & James Pustejovsky, eds. *Events as grammatical objects*, 285-334. Stanford: CSLI Publications.
- 矢澤真人 2000 「副詞的修飾の諸相」、仁田義雄・村木新次郎・柴谷方良・矢澤真人著『文の骨格』、187-233、東京：岩波書店。

Japanese suffix “-ppanasi” and its aspectual meanings

Konishi Masato

Abstract

In the studies of modern Japanese, aspectual meanings have been mainly researched by classifying verbs depending on the co-occurrence restrictions and their derivative meanings. However, there are two serious problems with this method: (1) if this method is correct, we would be able to classify all of the verbs accordingly, but there still remains many irregularities to be explained, and (2) there is no agreeable analysis of multiple affiliations of many verbs.

To analyze the aspectual meanings and to interpret them in terms of communication, Konishi (1997) introduces the concept of “types of events.” The aim of this paper is to describe the meanings of the Japanese suffix “-ppanasi” with this concept and to show how these interpretations are derived through the interaction with verbs, adverbial phrases, and other expressions.

In section 1, “topic + -ppanasi *da*” sentences are discussed. There are three main aspectual meanings, depending on their relative events.

- (a) Kono heya no denki wa tukippanasi da.
- (b) Boku wa zutto arukippanasi da.
- (c) Ano ko wa itumo asondara ashippanasi da.

Each sentence describes the following phases: (a) the resultant state after switching on the light (core or inner event), (b) the progressive state of walking (outer event), and (c) the state of neglect of the child after playing (whole event).

In section 2, “-ppanasi *de*” phrase are discussed. There are two aspectual meanings, depending on their main clauses.

- (d) Kagi o kakeppanasi de dekakeru.
- (e) Zutto utaippanasi de aruita.

In (d), the “-ppanasi *de*” phrase describes the background (or situation) of the event represented in the main clause. On the other hand, the “-ppanasi *de*” phrase in (e) refers to a period of time within the main event, and hence describes accompaniment.

Through these examinations of the suffix “-ppanasi,” two conclusions can be made: both constructions must be analyzed not with the static classification of verbs, but with the dynamic communicative concept: types of verbs, and verbs contribute to (the utterances of) the discourse, not by constructing the aspectual meanings as the most basic component, but by only providing the lexical meanings to the aspectual frames, which are independent of verbs, for the interpretation of the discourse.